

「バスマップ」の意義と課題に関する考察 ~和歌山都市圏公共交通路線図「wap」の取り組みから~*

A Consideration on means and problems about transit map*

From the program of drawing up "wap" (transit map on Wakayama)

志場 久起**・西川 一弘***・松本 暁****・辻本 勝久*****

By Hisaki SHIBA**・Kazuhiro NISHIKAWA***・

Satoru MATSUMOTO****・Katsuhisa TSUJIMOTO*****

1. はじめに

近年、都市圏の公共交通活性化の取り組みにおいて、いわゆる「バスマップ」の製作が各地で行われている。バスマップは事業者が製作する「バス路線図」ではなく、利用者である市民自ら、あるいは行政・事業者などと協働して作成されるマップのことである。その形態は地域によってさまざまであり、地形図と融合してバス路線を表記したり、時刻表をセットにするものなど、地域性に富んだ取り組みが行われている。

和歌山都市圏においても南海貴志川線廃線問題をきっかけに、産官学界が連携した「WCAN・交通まちづくり分科会」等が活動を行い¹⁾、その成果のひとつとして、2006年に和歌山都市圏公共交通路線図「wap」を作成した。この「wap」は単に地図とバス路線を融合したマップではなく、そこに住む(来る)利用者自身がまちを知り、まちを楽しむ行動と橋渡しをする「ツール」として位置づけている。すなわち、バスマップの意義を公共交通活性化だけではなく、利用者自身が「都市の魅力」を再発見する機会の創出にまで求めている。

本稿では「wap」作成の取り組みを通じて、バスマップの意義や効果、あるべき方向性について考察するとともに、今後の課題を整理する。

2. バスマップとは

(1) 一般論としてのバスマップの意義

バス路線の情報は一般的にわかりにくい。それはバスが「見えにくいネットワーク」である。なぜならバスが通る道路自体が汎用性の高い通路施設だからである²⁾。このようなバス路線を可視化させるために、路線図が必要であるが、事業者が作成している路線図では不十分な

ことが多い。ひとつの都市に複数事業者が存在する場合は、自社の情報しか掲載しないのでなおさらである。その事業者間の壁を乗り越えるため、利用者の視点に立った「バスマップ」を市民や行政と協働で作成する動きが各地で広がっている。その代表的な都市は、広島・福井・岡山・松江などである(表1)。

表1 主要3都市の路線図の特徴

	広島 ³⁾	福井 ⁴⁾	松江 ⁵⁾
サイズ	B2 両面	B3 両面 2 枚	A6 冊子形式
内容	広島都市圏の事業者別運行系統・本数の目安	福井市・県全域の事業者別運行系統・本数の目安	市内の鉄道・バス全路線の運行系統・時刻表
路線表記	地図ベース	地図ベース	模式図
配布	有償 300 円	有償 200 円	有償 200 円
Web	紹介のみ	最新情報を随時配信	最新情報を随時配信
紙質	上質紙	コート	コート

バスマップはバスのインフォメーションとしても重要である。バス事業が華やかだった頃は、幹線のバス路線では待たずに乗ることが出来るほどの本数があった。しかし、乗客の減少や効率化によって案内所(人)などが削減されると、路線の構造・ダイヤを把握しておかなければ、都市内での効率的な移動が困難になっている。

(2) 和歌山都市圏の現状

和歌山都市圏でも運行するバスの本数は年々減り続けている状況にある。また商業地が郊外のロードサイドに立地するなど自動車の普及が加速する状況もバスの運行本数の減少に拍車をかけている。

和歌山都市圏の公共交通が抱える問題のひとつは、都市構造にある。和歌山市内の主要ターミナル駅である和歌山駅と和歌山市駅は中心市街地のそれぞれ北東端・北西端に位置しており、主要行政官庁や繁華街に近接していない。したがって両駅を起点に放射状に伸びているバス路線が多く、バスの運行効率が悪いだけでなく、運行系統のわかりにくさをも招いている。

* キーワーズ：交通情報，市民参画，まちづくり

** 非会員，修士（教育学），WCAN 交通まちづくり分科会（和歌山市橋丁 23 NPO 法人市民の力わかやま内，TEL・FAX 073-428-2688）

*** 非会員，修士（商学），WCAN 交通まちづくり分科会（和歌山市橋丁 23 NPO 法人市民の力わかやま内，TEL・FAX 073-428-2688）

**** 非会員，CELab（和歌山市中ノ店北ノ丁 22-3F-1，TEL・FAX 073-460-6286）

***** 正員，博士（学術），和歌山大学経済学部市場環境学科（和歌山市栄谷 930 TEL073-457-7772，FAX073-457-7773）

また都市事情に目を向けると、かつては休日にもなる買い物客で混雑した和歌山市内随一の商店街「ぶらくり丁」をはじめ、周辺の商店街でも空き店舗が目立つ。郊外あるいは大阪南部の大型店舗などへ消費行動が流れているのである。和歌山市は紀州徳川家 55 万石の城下町として栄え、市内には様々な史跡や観光スポットも点在しているが、それらが市民共有の財産となり得ていない。まちの活性化には、そこに住む市民がまちを知り、愛着を持ち、まちに誇りを持てるような取り組みが必要である。ここ数年、市民の自発性による様々な取り組みが行われつつあるが、まだ端緒に過ぎない。

これら、和歌山都市圏の公共交通を取り巻く現状と、和歌山という都市をもっと知り、愛着を持つことができるような仕掛けとして、和歌山都市圏公共交通路線図「wap」の作成に至った。

3. wapの取り組み

(1) 事業の概要

この取り組みは平成 17 年・18 年度の 2 カ年にわたって国土交通省公共交通活性化総合プログラムとして採択された「和歌山都市圏 市民参加型公共交通活性化プログラム」の一環として実施された。このプログラムでは、交通事業者と沿線自治体関係者、WCAN 交通まちづくり分科会、経済界、学識経験者等による「和歌山 21 世紀型交通まちづくり協議会」による産官学民の連携を図る事業、鉄道沿線住民と事業所向けのモビリティマネジメント、本稿で取り上げる公共交通路線図の作成等がおこなわれた。プログラム全体としては、貴志川線問題を契機に、和歌山都市圏に関わる市民個人々の交通行動の見直しに少しでもつなげ、持続可能なまちづくりへつなげる、というコンセプトを掲げた。

(2) 作成意図

公共交通、とりわけバスの利用を促進するには、どこからどういう行き先の路線が、どれくらいの頻度で運行されているかを周知させる必要がある。先行事例を参考にしながら、和歌山でもわかりやすいバスマップを作成するために WCAN 交通まちづくり分科会内に「マップチーム」を設けて取り組みを進めた。

しかし、単に公共交通に関する情報を提供するだけではまちの魅力の再発見にはつながらず、「バスマップを用いてまちを巡ることができる」ことができないと、公共交通の利用の定着にはつながらない。そこで、「まちづかいマップ」として、マップを路線図にとどまらず「まちを巡る」ツールに位置づけることとした。

なお、一般の公共交通路線図の考え方にはその目的に応じていくつかの考え方がある。すなわち、路線を

デフォルメして表記することで見やすさを優先したり、路線の接続関係や本数の多少をわかりやすく表現したりする、実際の地図をベースに表記することで、バス路線と自宅や各種施設などとの位置関係をわかりやすく表現する、と双方の特徴を併せ持ったもの、などである。和歌山地区のマップ作成に当たっては、路線図は「まちあるき」の視点を考慮してを原則とすることとした。そして、市民の視点を取り入れること、Web ページとも連携し最新情報を随時補遺できるような仕組みを取り入れる方向性を確認した。

(3) 市民の視点の取り入れについて

市民の視点を取り入れたバスマップづくりを図るために、「トライバスロン」を 2006 年 3 月 21 日に開催した。これは、事業者が発行している路線図と主要バス停時刻表、それに 1 日フリーバスカードを用いて、あらかじめ設定されたチェックポイントを巡ってもらい、チェックポイント周辺の様子や公共交通に対する感想・意見等をワークシートに記入。和歌山市の歴史や風景、スポット等を「再発見」し、まち自体への興味を喚起するとともに、マップあるいは今後の「公共交通活性化総合プログラム」への運営に役立たせることを目的とした。

当日のチェックポイントは、和歌山市を代表する観光スポットや商業施設、公共交通の使い勝手の善し悪しを考慮したエリアなど 9 カ所に設置した。

参加者の感想やワークシートの分析より、風光明媚な箇所として知られる風景は、改めてその場に出向く機会が与えられると市民自身によってその良さが「再発見」されうる、路線図を読みこなし、バスに乗り慣れている参加者は効率よくまちを巡りながらポイントを巡っており、適切な交通情報の提供は都市の回遊性をも高めるきっかけになる、自家用車でしか行ったことがなかった商業施設の目前にバス停があることを初めて知ったという参加者が複数おり、よほど意識的な情報提供をしないと公共交通への転移は起こりにくい、バスで目的地に向かうという交通行動自体に対する新鮮さを感じられ、楽しみになりうるということがわかった。

(4) 制度設計

マップは予算面・携帯性の観点から A2 サイズとしたうえで、(2) で取り上げたマップの方向性をもとに議論を重ねた。

課題となったのは「どこまでの情報を盛り込むか」である。特に先行事例を参考にしながら、「見やすいマップ」と「役に立つマップ」とのバランスをどう図るかに注力した。事業者へのヒアリングの結果、主にバスを利用する用途は通勤通学、自動車に乗れない若年層・高齢者の移動が中心であるので、それ以外の世代にも訴求力

のある路線図にする必要性をもたせる必要があることを確認した。そこで、実在の人物を元に以下のようにユーザー像を設定し、この層への訴求を第一に設計を行った。

- ・最近和歌山市北部に転居してきた 20 代後半の女性
- ・夫は市内の企業に勤務し女性は専業主婦
- ・外出機会が増えたが、慣れない土地でどのような交通機関があるのかよくわからない

つまり、これから和歌山市内の移動の手段として公共交通を新たな選択肢に加えることを念頭においた設計とすることとした。事業者への取材では、市外からの乗客から「バスの乗り方がわかりにくい」という声が多いこともわかり、バスの乗り方をイラスト付きで掲載。市内在住者向けにも和歌山駅前、和歌山市駅前のバスターミナルの案内、和歌山市内の主要バス事業者 2 社の運行系統一覧、主要施設へ向かうことができるバス系統の一覧表を設けることで双方の利便性に考慮した形とした。

(5) マップの特徴

市内の主要バス事業者 2 社は合計 24 路線を展開しているが、24 路線を色だけで区別するのは困難であることから、できる限り色覚バリアフリーに配慮し、色数を絞り線種による区分をおこない、また近接した地区に近似色はなるべく配しないなどの工夫を施した。これは先行事例にはあまりない特徴である。

他都市の路線図では、運行本数に応じて線幅を変える、または系統一覧に目安を表記する、という手段が執られることが多いが、和歌山市内のバス路線は複数の系統が同じ道路を走るケースが多数あり、は路線図が見づらくなると判断、も限られた紙面では記載に限界があると判断し、今回はマップ上では運行本数の区分は行わず、それらの情報は Web ページで補完することとした。

マップの表面は表紙、コンセプト、バスの乗り方、市内中心部の路線図、主要目的地にたどり着くための路線の系統番号を表記、裏面は和歌山市全域図を表記するとともに 2 社の系統番号を方面別に一覧表にして掲載した。このほかに和歌山市内に乗り入れている路線バス事業者 3 社についてはほとんどの区間で他社と路線を共有していること、本数が僅少であることから紹介にとどめ、それらも Web ページで補完することとした。

また、単なる路線図ではなく、公共交通を使って「まちをめぐる」ことを想定して、どの筆記具を使ってもマップへの書き込みがしやすい紙を選定することとし、鉛筆・水性ペンでの書き込みも比較的しやすい非木材紙を採用した。同時に、マップ利用者が自分の目的地や気になるポイントなどを自由に書き込めることを謳い、「世界で一つだけのマップ」をつくることができることを打ち出した。

マップのネーミングも親しみを持たせるように、地図

の英訳「map」と、和歌山の頭文字である「w」を合成した造語「wap」とした。表紙も公共交通機関になじみのない層への訴求力を考慮、「wap」のロゴを前面に押し出したものとし、「手に取ってもらえる」「バスに乗るのは楽しいよ」というメッセージ性を持たせた、この種の路線図では異色のデザインとした。

(6) 「まちをめぐる」ための仕掛けづくり

「wap」に掲載した沿線施設の情報は、市外から転入する住民にとって必要最小限な公共施設、和歌山市内でランドマーク的に取り上げられる建物、「トライバスロン」などで参加者・市民の声として挙げられた施設や観光名所などに限り、補足的に全国的なトピックをコラム風として掲載することとしたが、ほかの寺社仏閣や史跡等はほとんど掲載していない。あえて利用者に提供する情報を最小限に絞り込んで、マップを「使いこなして」まちを「歩きたおす」ために、できるだけシンプルに路線網を表記できるように試みた。

代替手段としてマップを補完する形で Web を利用した情報発信を充実させるために、一般市民（「まちレポーター」と称している）から寄せられた、隠れた名所等の情報を Web ページ「wap ONLINE」に蓄積する試みを進めている。これまでの観光案内、施設案内のように、行政やタウン情報誌等から「与えられる」情報だけではなく、市民がまちの魅力を「自ら発見して自ら発信する」ことを促進させることとした。

なお作成の最終段階では「和歌山 21 世紀型交通まちづくり協議会」に参加している交通事業者や沿線自治体の交通部局担当者等にも原案を提示したうえで、意見・提案などをいただいた。現場・行政サイドからの意見を盛り込むことでより正確性が増し、まさに「官民協働」のプロセスを経たマップとなった。

(7) 配布について

2006 年 10 月に完成した「wap」の配布はラックなどへの設置による一般向け配布、トラベル・フィードバック・プログラム (TFP) などのモビリティ・マネジメント (MM) ツールとしての配布の 2 通りがあった。

一般向けとしては和歌山市の関係課、観光案内所、一般店舗、和歌山市内の交通事業者、和歌山大学などで配布をおこなった。また和歌山駅前広場ではアンケート収集もかねて手配りによる配布もおこなった。

モビリティ・マネジメントツールとしては和歌山市内の事業所職員、和歌山大学の学生、そして鉄道沿線住民向けの TFP ツールなどに利用された。

4. バスマップの効果

「wap」の評価は市民向けのアンケートと、事業所向けMMプログラムによってなされた。

前者は「wap」を手にした市民への聞き取りによる対面式調査と「wap」に封入したはがきを返送する形での記入式調査によって行い、後者は和歌山県庁と和歌山市役所の職員のうち日ごろからマイカー通勤している方を対象とした標準TFPの一環として行った。

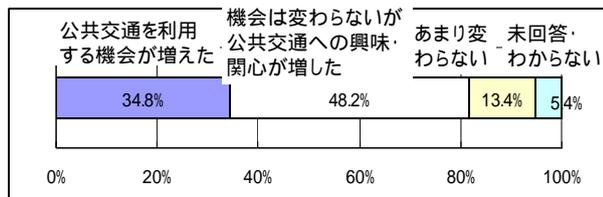


図1 wapによる公共交通利用効果(市民・n=117)

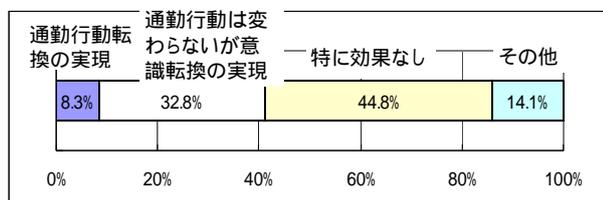


図2 wapによる通勤行動の変化(職員・n=746)

市民向けアンケートではこのようなマップの存在は公共交通の利用促進あるいは興味・関心を増すという回答が合わせて8割に達した。また、TFPに参加した事業所職員は「wap」が通勤行動転換の実現に役立ったという回答が8.3%、公共交通への意識が変わった職員を合わせて約4割となった。

このようにすでに一定の通勤行動が確立されている事業所職員についても一定の行動変容効果と意識変容効果が確認された。また、このようなマップの存在により、一般市民の公共交通利用意識が向上するだけでなく、公共交通利用行動の増加にまでつながることも確認できた。

しかし「wap」に追加してほしい情報として挙げられたのは「主要駅やバス停の時刻」が多く、市民にとっては「wap」は「路線図」の域を脱していない。「wap」紙面には「たくさん書き込んで自分だけの『wap』を作り上げてください」と記載し、「wap ONLINEとの連携」も謳っているものの、目に見える効果はあまり出ていない。なお、wapの利用用途としては「通院・買い物」、「レジャー」の順に多かったことから、まちを楽しむツールとしてこの「wap」を活用して、公共交通を日常の交通行動のなかに取り込む余地は十分考えられる。

5. バスマップの方向性と課題

(1) バスマップがねらう方向性とは

本事業を通して、事業者の枠を越えた都市圏全体の公共交通路線図の存在によって、公共交通の利用促進あるいは意識向上に結びつくことの普遍性は確認できた。しかし、貴志川線問題などを通じて公共交通を通じてまちを見直そうという機運が高まっている当地でも、マップやWebページによる仕掛けだけでは「まちあるき」「再発見」にはつながり得ないことも改めて実証された。

一般にまちづくりにはキーマンの存在が叫ばれる。まち全体を可視化して、まちへの気づきのきっかけを深めるためには「人づくり」としての総合学習や社会教育に「wap」のような取り組みを絡ませていく必要がある。

実際に福井市で「ふくいゆりのりマップ」を発行しているNPO法人ふくい路面電車とまちづくりの会では、福井市などの小中高校へマップを配布し、総合学習の題材としての活用や通学への公共交通利用の促進活動を展開している。産官民協働で、公共交通の利用促進と環境にやさしいまちづくりに向けた取り組みを実現していく好事例といえる。

(2) 今後の課題

これまで各地で作成されている「バスマップ」の多くは1枚に情報をまとめるという志向が多かったのは否めない。1枚にまとまると情報は集約されるが、それゆえ情報過多になったり、文字を小さくせざるを得ないなどといった問題が生じる。各地の事例を通して、バスマップ自体のカスタマイズ性、あるいは同一都市圏でも目的別バスマップを作成するなど、利用者の多様性に応じたマップ作成の必要性が、マップを作成している団体間で共有されつつある。また単にマップによりバス・鉄道を如何にわかりやすく利用してもらうか、だけではなく、マップも活用したまちの魅力を感じられる仕掛けづくりを通して、まちづくりの担い手としての「自立した」市民の育成も図ることも視野に入れて、都市計画など大きな視点からのマップづくりが必要である。

今回の取り組みを通して見えた成果と課題を活かし、さらなる「よりよいマップ」づくりを図りたい。

謝辞：wapならびに本論文作成にあたり、Design Roof主宰の馬場智紀氏、「全国バスマップサミット」参加団体、なかでもNPO法人ふくい路面電車とまちづくりの会の皆さんの多大な協力を得た。ここに感謝申し上げる。

参考文献

- 1) 辻本勝久・WCAN 貴志川線分科会：「貴志川線継続に向けた市民報告書～費用対効果分析と再生プラン～」和歌山大学経済学部『Working Paper Series』No.05-01, 2005.
- 2) 高橋愛典：「地域交通政策の新展開 バス輸送をめぐる公・共・民のパートナーシップ」白桃書房, P25-27, 2006.
- 3) 広島LRT研究会：「バスの超マップ第6版」中国・地域づくり研究会, 2006.
- 4) NPO 法人ふくい路面電車とまちづくりの会：「ふくいゆりのりマップ第4版」, 2006.
- 5) まちかど研究室：「どこでもバスブック[松江]」6号, 2006.